アマードとブラジル北東部

神　代　　修

目　次

Ⅰ　アマードと作品　——序にかえて——…… 119
Ⅱ　『赤い種子』…… 122
Ⅲ　地方主義と北東部…… 125
Ⅳ　苛酷な自然…… 129
Ⅴ　「飢えの道」…… 132
Ⅵ　迷信と野盗…… 136
Ⅶ　アマードと北東部文学　——結びにかえて——…… 139
別表　ブラジルの地図…… 142

Ⅰ　アマードと作品
——序にかえて——

ジョルジェ・アマード (Jorge Amado, 1912～　　) はカストロ・アルベス (Castro Alves, 1847～1871), エウクリデス・ダ・クーニャ (Euclydes da Cunha 1866～1909) らとともに, ブラジル文学史上もっともすぐれた作家であるだけでなく, チリのパブロ・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904～　　), グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアス (Miguel Ángel Asturias, 1889～　　), キューバのニコラス・ギリェン (Nicolás Guillén, 1904～　　) らとならんで, 現代ラテン・アメリカ文学を代表する世界的な作家の一人でもある.[①]

① アマードは, 『赤い種子』で1951年度のレーニン国際平和大賞を受賞し, 作品は現在までに31カ国語で紹介されている. その思想的傾向からいえば, アラゴン, エレンブルグ, ゼーガースらの系列にはいり, 彼らとほぼ同等に評価されている. (たとえば, 第2回ソビエト作家大会におけるエヌ・エス・チーホノフの報告「現代世界の進歩的文学」)

簡潔にして明確な文章，リリシズム，透徹したリアリズムなどによって独自の作風をつくりだしているだけでなく，彼の出身地であるブラジル北東部（O Nordeste）に内在する社会的諸問題と真正面から大胆に取組み，現実を赤裸々にえぐりだすとともに，その分析の手法を社会主義リアリズムに昇華させ，きわめて意欲的な作品を発表している．

彼の多くの作品の舞台となるブラジルの北東部は，ポルトガルの植民地時代の伝統・因習と封建的遺制を温存した貧困・後進地帯であり，「ブラジルの恥部」といわれている．日照り，密林，砂漠，大平原，大河など熱帯特有の苛酷な自然条件に加え，貧困，飢餓，疾病，失業，売春，迷信，野盗行為，文盲などの社会悪と不正を内包した，ブラジルの矛盾の結節点でもある．

アマードは北東部出身の作家として，じかにこれらの苛酷な自然と社会悪に接触し，これらの諸問題を芸術家らしい，ゆたかな鋭い感性で追求し，えぐりだしている．本稿では，これら北東部の社会的諸問題を取り扱った彼の作品のなかでも傑作といわれる『赤い種子』（Seara Vermelha）を中心に，北東部の自然と社会の生態を分析してみたい．

ところで，アマードは日本ではまったく未知の作家なので，はじめに，彼の現在までの作家活動を作品別に分類すると，ほぼ三つの時期に分けられ，『赤い収穫』はその第二期の作品にあたる．

第一期は1932年から1937年までで，まず1932年に処女作『謝肉祭の国』（O País do Carnaval）を発表後，『カカオ』（Cacau），『黒人ジュビアバ』（Jubiabá），『汗』（Suor），『死の海』（Mar Morto），『浜辺の放浪者』（Capitães da Areia）などを出版した．これらの作品はアマードの故郷バィーア（Bahía）州を舞台にした「バイーアもの」といわれる一連の作品である．[②]

② アルトゥール・ラモス（Artur Ramos）はこれら初期の作品のなかで，『黒人ジュビアバ』を「もっとも強くバィーアの香りを浸透させた作品」だとしている．（Artur Ramos : Negro in Brasil, The Associated Publisher, inc., 1951, p. 143.

カカオ・プランテーションで働く労働者，バイーア市のスラム街，「Black Rome」といわれるバイーア市の最底辺に生きる黒人，アフリカの原始宗教とキリスト教との混交である黒人宗教（macumba），saveiro と呼ばれる小舟をあやつり，その日暮らしの生活を送る船乗りや漁民，バイーアの民謡（ABC），アフリカの神々（Yemanjá, Ogún, Orixá），家なき浮浪少年たち．これらのテーマが青年作家らしい，荒けずりながら，ダイナミックなタッチで実にいきいきと描かれている．しかも全部の作品を通じて，奴隷状態に置かれた人びとの権利はく奪にたいする抗議がみられる．

第二期は海外での亡命生活（1937～1941）と沈黙が終わり[③]，意欲的な作品を発表した1954年までで，この期間には『カストロ・アルベスの歌』（ABC de Castro Alves），『希望の騎士』（O Cavalleiro da Esperança），『はてしない大地』（Terras do Sem Fim），『イレウスの聖ジョルジェ』（São Jorge dos Ilheus），『赤い種子』（Seara Vermelha）が出版された．

最初の二つは，ブラジルが生んだ民族詩人で奴隷解放に一生をささげたカストロ・アルベスと，ブラジル共産党書記長で，「希望の騎士」と賛えられるルイス・カルロス・プレステス（Luís Carlos Prestes, 1898～　）の伝記である．しかしこれらはたんなる伝記でなく，ブラジルの近代史であり，ブラジル民衆の解放闘争史でもある．

あとの三つは，ブラジルの大土地所有制（latifundio）である大農場（fazenda）をテーマにした三部作（trilogy）で，『はてしない大地』では南バイーアを舞台にカカオ・プランテーションの歴史をたどることによって，ブラジルの近代における封建制の特色を明らかにし，『イレウスの聖ジョルジェ』では，資本主義の勃興と封建制の崩壊過程を描くとともに，「イレウスの空をおおう多頭のドラゴン」[④]である帝国主義を登場させてい

③ この点については「結び」を参照．

④ Inna Tynyanova: The Power of Human Thought, Soviet Literature, No. 8., 1955, p. 154.

る.

この二つの作品が大土地所有制を支配者=所有者（fazendeiro）の面から取り上げたのにたいし，『赤い種子』では農民とりわけ貧農の生活をテーマにしている.

第三期は1955年から現代にいたるまでで，この間三部作『自由の地下道』(Os Subterrâneos da Liberdade)，『ガブリエラとカーネーションと肉桂』(Gabriela, Cravo e Canela)，『老いた船乗りたち』(Os Velhos Marinheiros)，『夜の牧者たち』(Os Pastôres da Noite）が発表されたが，これら作品には舞台を南部のサン・パウロ（São Paulo）に移したものもあるし，『赤い収穫』とは直接に関係がないので，紹介を省略したい.

II 『赤い種子』

『赤い種子』はブラジル北東部の貧農の生態を，目をそむけさせるような悲惨さを，心にくいまでもリアルにえぐりだし，大土地所有制と封建制の悪，社会の不正，みにくさなどに怒りを放った「抗議の文学」(literatura de protesta）である.

北東部の刈分小作農（meeiro）ジェロニモ（Jerónimo）一家が長年住みなれた土地から追われ，「黄金郷」(el dorado）とうわさされている南部サン・パウロのコーヒー農園をめざして移住して行く物語は，ブラジル版『怒りのぶどう』である．オクラホマの貧農ジョード一家が2000マイルの行程を，山脈を越え，砂漠を横切って，「天国」といわれるカリフォルニアに移住して行く姿は，舞台こそちがえ，ジェロニモ一家の運命とまったく瓜二つである．また，「スタインベック文学の一つの特徴である素朴な，一見無技巧とも思える荒けずりの動的な手法」[5]もまさしくジョルジェ・アマードのそれである．しかし『赤い種子』には，『怒りのぶどう』に稀薄

⑤ 大久保康雄訳『怒りのぶどう』，六興出版社，1952年，389ページ.

な社会意識・階級性が明確に出ており，問題の所在が的確に示されている．

『赤い種子』の題名は，カストロ・アルベスの詩「苦痛と反抗の芽は，血と飢えの赤い種子まきのあとで成育し，いまや収穫の時期がやってきた」[6]から引用したもので，その引用どおりに，物語は「種子まき」にはじまり，「飢えの道」と「希望の道」を経て，「収穫」で終わる構成になっている．

「種子まき」．貧農の結婚の披露宴の夜，彼らの働いている農場が売られた知らせがもたらされ，喜びは一転して悲しみに変わるところから物語がはじまる．

彼らを追い出そうとした監督（capataz）に個人的報復を企図する者がいて，これが新地主に小作人追放の口実を与え，貧農たちは長年住みなれた土地から追われ，四散しなければならなくなる．

刈分小作農のジェロニモと弟ジュアン・ペドロ（Juan Pedro）一家の13名——ネコとロバも家族の構成員であった——は南部サン・パウロのコーヒー農園に職と安住の地を求めて，長途の旅に出発する．弟の妻は迷信家で，13の数を不吉なものと感じ，事実その予感はのちに的中することになる．

「飢えの道」．彼らは北東部の奥地（sertão）にはてしなく広がるカアティンガ（caatinga，荒涼たる原野で，一種の砂漠）を歩き，ブラジル第二の大河サン・フランシスコ河（São Francisco）に面する，ジュアゼイロ市（Juázeiro）まで行き，そこからサン・フランシスコ河を船で航行し，上流のピラポラ市（Pirapóra）で下船して，サン・パウロ行きの移住者列車に乗るユースを取ることになる．

しかしその道は「飢えの道」であり，「死の道」である．一行は飢えと，

---

⑥ Jorge Amado: Seara Vermelha, Livraria Martins, 1946, p. 261.

カアティンガの焼けつくような暑さのため渇きになやまされる．針ネズミ，トカゲ，ヘビ，飼いネコなどありとあらゆるものを口にし，飢えをしのぐが，途中病死してハゲタカ，ピラニヤの餌食になる者，失踪する者，脱落する者，売春婦に転落する者があいついで出，サン・パウロにたどりついた者は13名中わずか4名であった．しかも一行の長であるジェロニモも，途中のむりがたたって，のちに肺結核で病死することになる．

「希望の道」．舞台は一転して，一行よりさきに故郷の北東部に見切りをつけ，南部に出たまま行方不明になっていた三人の息子たちの身の上に移る．次男のジョゼ（José）は野盗（cangaceiro）の群れに投じ，北東部を荒し回っている．長男ジュアン（Juan）は兵士として，その野盗討伐の遠征に加わり，交戦中弟に射殺される．一方，三男のジュベンシオ（Juvencio）はコムニストになり，ブラジル革命史上名高い1935年革命に参加し，目ざましい働きをする．しかし逮捕されて，リオ・デ・ジャネイロ（Rio de Janeiro）の収容所に監禁される．

「収穫」．息子が収容所にいるのを知った母親は，孫アントニオ（Antonio）をつれてサン・パウロからリオに向かう．何年ぶりかで対面した息子の，肉体的・精神的成長ぶりに驚き感激し，またアントニオは叔父の毅然たる態度にひかれて，政治的にめざめて行く，

釈放されたジュベンシオは，党のオルグとして故郷の北東部の農村地帯に派遣された．そこで見たものは，出奔以前の旧態いぜんたる北東部の姿であるが，いつかそこにも夜明がくるものと信じつつ，父たちがたどった道をとおって帰途につく．

これは悲惨そのものともいえる物語であるが，この作品にみられる渇き，飢え，病気，売春，略奪，迷信などはたんにジェロニモ一家だけでなく，北東部の農民全般に，いまなお共通した現象である．

とはいうものの，すべてが暗く，悲惨で，救いがないわけではない．著者はこれらの否定的な断面にメスをあてて，これをえぐり出するとともに，

未来に明るい希望を求め，積極面を否定面と対置させている．「飢えの道」のあとに「希望の道」が開かれており，その前途への夢と希望が政治的に自覚したジュベンシオとアントニオに託されている．

この物語には主人公がなく，しいていえば貧農全体がそれにあたるが，著者はその貧農の理想像をジュベンシオに求めている．同時に理想的な女性として，一家の犠牲になって売春婦に転落した次女のマルタ（Marta）を登場させている．また，北東部の貧農たちの持っているいくつかのタイプを，ジェロニモ一家を通じいきいきと浮き彫りにしているのもこの作品の特徴である．

ジュベンシオが未来に希望を持つ理想的な貧農だとすれば，第二のタイプつまり貧困，苦悩，悲惨さを宿命として甘受し，忍従している貧農に属するのがジェロニモ，ジェアン・ペドロたち．苦しみを宗教への逃避によって解消しようとするのが，第三のタイプに属する，ジェロニモの妹で気が狂ったゼフア．権力者にたいする反抗を，個人的な報復手段によって実現しようとするジョゼは第四のタイプ．そして最後のタイプに属するのが，支配体制のなかに入り，それに順応しているジェアンである．

この作品の時代的背景は1920年代から1940年代までであるが，ジェロニモ一家がたどったのと同じ悲惨な移住者の運命を，いまもなお北東部の農民たちはたどっている．その生態を分析するまえに，北東部の社会が形成された歴史的な背景を解明してみよう．

Ⅲ　地方主義と北東部

ブラジル人は，国土が広大なせいもあって，地域別の名称でおたがいを呼び合う．たとえば，リオ・デ・ジャネイロの人はカリオカ（carioca），サン・パウロの人は，パウリスタ（paulista），ミナス・ゼライス（Minas Gerais）の人はミネイロ（mineiro），バイーアの人はバイアーノ（bahiano）といったふうに．

北部の密林（selva）地帯アマゾン（Amazonia）から，北東部のセルトン（sertão）と呼ばれる奥地，カアティンガ（caatinga）と呼ばれる一種の荒涼たる砂漠地帯，シャパーダ(chapada）と呼ばれる西部の広大な平原，沼沢地帯，南部のパンパ（pampa）と呼ばれる緑の草原地帯から，リオやサン・パウロなど欧米と変わらぬ大都市にいたるまで，きわめて多彩な地理的分布を示している．

また人種的にも，白人，黒人，インディオ（indio），ムラート（mulato, 白人と黒人の混血），カボクロ（caboclo, 白人とインディオの混血），カフーゾ（cafuso, 黒人とインディオの混血）の複合社会を形成している．

このように地域の広大さ，人種の多様性からして，ブラジルは，一つの統一体と見るのにはあまりにも複雑な要素を内包している．このためブラジル人はよく regionalismo（地方主義）という言葉を使う．これは上述のように，「今日においても，どの角度から問題をみても，ブラジルは統一を欠いている⑦」ことを立証するものである．

このことはブラジル文学についてもいえるわけで，だからブラジル文学を研究するにあたって，「同文学を歴史的なものとしてよりも，地域的なものとして検討することの方を，論理的な規準として採用すべきである⑧」との見方も成り立つわけだし，筆者もこの意見には賛成である．

ブラジルの北東部は大西洋に向かって突出した三角地帯で，バイーア（Bahía），セルジーペ（Sergipe），アラゴアス（Alagôas），ペルナンブーコ（Pernanbuco），パライバ（Paraíba），リオ・グランデ・ド・ノルテ（Rio Grande do Norte），セアラ(Ceará），ピアウイ（Piauí），マラニョン（Maranhão）の9つの州を指し，ほぼ熱帯に属している．（142ページの地図を参照）ブラジルの全人口の3分の1にあたる2500万の人びとがこの地方に

⑦ Fred P. Ellison : Brasil's New Novel, University of California Press, 1954, Foreword IX.

⑧ ibid., Foreword IX.

住み，一般に北東部人（nordestino）と呼ばれている．

ブラジルの歴史は北東部からはじまったいってもさしつかえない．というのは，1500年にブラジル発見後，ポルトガルによる植民が北東部を中心におこなわれ，1763年まで首都がバイーアに置かれたからである．

植民地化は砂糖と綿花を中心として進められ，1531年ペルナンブーコに砂糖プランテーションがつくられたのを皮切りに，大土地所有制にもとづく砂糖，綿花プランテーションが北東部の各地にみられるようになった．これらのプランテーションは，当時のスペイン領であったカリブ海地域にみられたものと同じで，本国の資本の本源的蓄積を支える強力なテコになった．

プランテーションの労働力は当初原住民のインディオであったが，これらインディオたちは酷使された結果，絶滅あるいはそれに近い状態になり，代わってアフリカから黒人奴隷が輸入され，彼らもインディオ同様酷使された．彼らは senzala と呼ばれる奴隷小屋に住み，一方雇用主である砂糖農場主（senhor de engenho）は casa-grande と呼ばれる大邸宅に住んでいた．また大邸宅を中心としたプランテーションには教会，製糖工場，職人の住宅，売店などがあって，一大社会集団を形成していた．

この社会集団における砂糖農場主の権力は絶対であり，白人，黒人，インディオを含め何名ものめかけを置き，混血の子どもをかかえ，大家族制度ができあがっていた．ブラジルは混血の国といわれるが，それにはこのような歴史的背景がある．要するに，当時のブラジル社会・経済を支えていたのは，黒人奴隷・家父長制・砂糖の単一栽培制であったといえよう．

このように，北東部は植民地時代，砂糖に基礎を置くゆたかな農業経済の中心であり，その社会は奴隷を酷使する大地主の貴族社会であった．そしてその基礎のうえにブラジルでもっともすぐれた政治家，学者，芸術家，詩人，作家たちが何人か生まれ，独特の安定した文化がおこった．この点で，北東部と他地方の文化を論ずる場合，植民地的遺産と伝統の面におい

て明確なちがいがあることを忘れてはならない.

しかし，その後中部のミナス・ゼライス州に金鉱が発見されてゴールド・ラッシュがみられ，南部のサン・パウロ州にコーヒーと綿花の資本主義的経営がおこり，アマゾン地方でゴムの栽培が開始され，首都が1763年にリオに移され，また1888年に奴隷制度が廃止されて，労働力を失ったため，北東部は衰退の一途をたどることになった．一口でいえば，南部に資本主義が勃興したのにたいし，北東部は植民地時代そのままの封建制を温存し，その発展がおくれたのであった.

そして，いまもその大土地所有制度は変わることなく，奴隷解放後，大地主たちは刈分小作農（meeiro)，作男（peão)，雇用農（colono)，季節労働者（trabalhador）などの労働力に依存し，彼らを搾取する半封建的・半農奴的生産様式が基本的なウクラードになっている.

かつて砂糖農場主として大邸宅に君臨した家父長は，いまや近代的な農場主(fazendeiro)になり，農場(fazenda）と大邸宅の管理を監督（capataz）にまかせ，不在地主（absentista）としてサン・パウロやリオに住み，まったくの寄生的な生活を送っている.

農場の大きさなものは日本一国にも相当し，そこにはむかし同様，大邸宅を中心にして，農民たちの掘立て小屋，農場の売店，教会，私設警察などがあって，一種の封建王国を形成している．このような情景を，ブラジルの社会学者ジルベルト・フレイレ（Gilberto Freyre, 1900～　）は次のようにのべている.[9]

「ブラジルにおいて，16世紀の前半来つづいている白人と有色人種の諸関係は，一方では経済の生産組織――単一栽培制と大荘園――によって，また一方では征服者たちのあいだに白人の女性がすくないことによって左右されたのである.

---

⑨ Gilberto Freyre: Master & Slaves, Alfred A. Knopf, 1964, p. 4.

製糖業はブラジルの木（pau-brasil, 赤色の染料．ブラジルの国名はこの木から出た）と皮革の貿易（牧畜の副次産業として皮革業が発達した）によって代表される民主的な諸産業を抑圧しただけでなく，多様な農業の源泉となる土地と，大農園の周囲に広く発展する牧畜業を不毛にしてしまった．

砂糖業は巨大な数の奴隷を求めた．そのうちに牧畜業はかえりみられなくなり，それと同時に民主的な生産様式を生む可能性が失われた．農業地帯では，ほかの生産様式を吸収した単一栽培制とともに半封建制社会が発達した．そこには少数の白人と浅黒いムラートがいて，石とモルタル造りの大邸宅から，奴隷小屋にぞくぞく生まれる奴隷たちだけでなく，刈分小作農はもちろん借地農，占有農など泥とわらの小屋に住む，言葉のもっとも厳密な意味での，大邸宅の奴隷にあたる人たちを家父長的に，暴君的に支配していた」

Ⅳ 苛酷な自然

このような北東部の特色について，フレッド・エリソンは北東部社会を「対照の土地」(a land of contrasts) と呼び，次のような分類を試みている[⑩]．

① 熱帯海岸の緑色と乾燥した奥地の褐色．

② 都市と農村のプランテーション．

③ 大邸宅と奴隷小屋．

④ 金持ちと貧乏人．

⑤ 白人と黒人．

エリソンのいうように，たしかに北東部には明暗極端なもののほかに中間的な存在はありえないかにみえる．これはジルベルト・フレイレものべ

⑩ Brasil's New Novel, p. 31.

ているところで，「奴隷制に基礎を置く大荘園の単一栽培制は，貴族社会をつくりだす過程において，ブラジル文化を上流階級と奴隷という二つの極端なものに分け，中間にひとにぎりのとるにたらぬ自由な人たちを残存させただけである」

エリソンのいう「熱帯海岸の緑色と乾燥した奥地の褐色」にふれると，植民地時代から早く開けた発展した北東部の海岸地方の相対的なゆたかさは別にして，一歩セルトン(sertão) と呼ばれる奥地に入ると，緑の海岸とはまったくの別世界である荒涼たる大地が横たわっている．乾燥地帯で，そこにはえているのはサボテン類だけで，caatinga と呼ばれる焼けつくような砂漠．ブラジル第二の大河で，どう猛なピラニヤが住み，マラリアが猛威をふるっているサン・フランシスコ河．人跡未踏で，いまなお人間を寄せつけない密林(selva). sêca と呼ばれ，家畜を倒し，作物を枯らし，農民を土地から追い出す日照り．——これらの自然とその猛威については，北東部の作家たちがよく取り上げるところだが，アマードの作品からそれを引用してみよう[11]．

「カアティンガは荒涼として無気味に広がっている．まばらなとげのはえた灌木が，砂漠のような北東部の乾燥した狂暴な奥地に，何レグア（1レグアは約5キロ）にも何レグアにもわたってみられる．

ヘビやトカゲが真昼の焼けつくような太陽の下で，石のあいだをはいずり回っている．古風な彫像のように，動かぬ目に表情もなく，のろのろして，創世紀の名残りをとどめている大トカゲ．ガラガラヘビ，マムシ，スルクク，ジャララカなどもっとも毒の強いヘビ．木々がゆれるさい，太陽の暑さに耐えきれずトカゲが飛び出すさい，ヒューヒューと音がする．

とげのある植物がカアティンガに交錯している．カアティンガは横断することのできない砂漠であり，日照りととげと毒ヘビの，また小道らしい

---

(11) Seara Vermelha, p. 30.

小道さえなく，日蔭となる木さえなく，甘いくだものさえなく，あらゆるものが欠乏した北東部の，踏み込むことのできない中心部である．（中略）とおり抜けることのできないとげの茂み．北東部全土を通じ，何レグアも何レグアも広がっているカアティンガの砂漠．道もなく，小道もなく，細道もなく，水もなく，影もなく，小川もなく，横断するのは至難のわざである．これが北東部のカアティンガである」

また，この北東部の中心をなすカアティンガと対照的な密林（selva）について，次のように描写している．[12]

「密林は眠りつづけていた．その上を昼と夜がとおりすぎ，夏の太陽が照りつけ，冬の雨が降っていた．木々は何百年もの樹齢を数え，永遠の緑はその山のあたり生まれて，平原を犯し，無限のかなたに消えて行く．それは神秘に包まれた未知の海のようだった．

密林は肉体が情欲の炎をけっして感じたことのない処女のようだった．何百年もの歳月を経た木々があったけれども，処女のように美しく，まばゆく，若かった．まだけがれを知らぬ処女の肉体のように神秘的だった．……

密林から，太陽が昇る夜明けとともに，鳥のさえずりがきこえてきた．木々の上を夏ツバメが飛びかい，サルの群れは枝から枝へと，丘の上から下へと，ものすごい早さで走っていた．フクロウは静かな夜の黄色い月に照らされて，不気味な鳴き声をあげていた．その叫び声は，人間がまだ密林にやってきていなかったので，その不幸を告げていなかった．あらゆる種類の無数のヘビは音も立てずに，乾いた葉のあいだをすべるようにはいずり回っていた．ジャガーは発情期の夜ごと，すさまじい声をあげていた．

密林は静かに眠っていた．数百年を経た大木とかずらはからみ合い，泥沼といばらはその眠りを見守っていた」

---

⑫ Jorge Amado: Terras do Sem do Fim, Livraria Martins, 1943, p. 33.

北東部の人たちはたえずこのように苛酷な自然と闘い，あるときはそれに屈服し，あるときはそれを征服し，人間社会を形成して行った．既述のカカオ・プランテーションの開拓を取り扱った『はてしない大地』は，ブラジルの封建制度を浮き彫りにした作品であるが，同時に猛威をふるう自然との対決において，局限状態に置かれた人間の姿を赤裸々に示したものである．これはとりもなおさず現在の北東部人にもあてはまるわけで，われわれはその姿を次の「飢えの道」においてもみるのである．

V 「飢 え の 道」

北東部のカアティンガや密林などの狂暴な自然のほかに，半封建的な構造を持つ社会から必然的に諸問題が生まれ，これが北東部文学の主要なテーマになっている．飢餓，貧困，売春，文盲，迷信，疾病，搾取，強奪，追放，移住，反乱などがそれである．だから，エリソンもいうように[13]，「北東部の文学は社会階級の荘園主とプロレタリアを対象した社会的文学にならざるをえない」のである．

さきにもふれたように，現在北東部の支配的なウクラードは半封建的・半農奴的な生産様式であるが，その基本的な労働力である刈分小作農は，折半地代として収穫物の半分を農場主に納めるほかに，週一回の無料奉仕を義務づけられている．また生産に必要な種子，農機具はもちろん，日用食料品，衣料品などを農場内の売店から購入しなければならない．地代を納められない場合は土地を一方的に取り上げられ，借金を払えないときは借金奴隷として作男の地位に転落し，土地に緊縛される運命をたどる．

このほか，一定の期間の雇用契約を結んでいる雇用農や，渡り者の季節労働者はいっそうみじめな存在である．これらの貧農たちは，山いもの一種であるタピオカを乾燥させて粉にしたものや，トウモロコシを常食にし

---

⑬ Brasil's New Novel, p. 5.

ていて，慢性的な栄養不良の状態にある．

そのうえ，農民のほとんど全部がまったくの文盲である．また北東部に特有の日照り（sêca）に襲われると，たちまち飢えに見舞われ，土地から追われて移住の旅に出かけて行く．しかしそれは「飢えの道」であり，「死の道」であり，多くの者は途中で落伍してしまう．この姿をアマードは次のように描写している⑭．

「……そのカアティンガにあらゆるところから分け入り，無数の農民たちがそこを横断しようとする．彼らは大農園と日照りとによって土地から追い立てられ，家から追っ払われ，農場で仕事をなくした人たちで，サン・パウロ地方を求めて南下して行く．サン・パウロは移民たちの黄金郷（ニルドラード）である．

彼らはカアティンガを横切り，いばらのあいだをとおって道を開き，油断のならない毒ヘビをさけ，渇きと飢えにうち勝ち，生皮のサンダルをはき，手を裂き，顔を傷つけ，心に絶望をいだきながら，北東部のあらゆるところから恐怖の旅に出発する．

中断することなくつづく多くの人の列．それはずっと前にはじまり，いつ終わるとも知れぬ旅である．なぜなら毎年土地を失った人たち，搾取された人たち，地主と日照りの犠牲となった人たちがその身内の者，その子ども，その最後の力を結集し，長期の冒険旅行を開始しているからである．（中略）飢えと病気は道中を死体だらけにし，カアティンガの土地を肥やす．（中略）そしてこの移住は，水滴が次から次へと落ちるように，いつもあとにつづく同じ人たちによって再開される．どす黒い色をした同じ顔，サンダルからはみ出た肉太の指の，同じ大きな足，同じまばらな毛，同じやせた強い体，色気のない疲れはてた同じような女たち．彼らはカアティンガの砂漠を零落した生活，悲痛な叫び声，足音でいっぱいにしながら細

⑭ Seara Vermelha, p. 40.

道を切り開くが，細道はそのあといばらによって閉される」

移住者たちはカアティンガをやっとのことでとおり抜けると，今度はジュアゼイロ市からサン・フランシスコ河を南下し，ピラポラ市からサン・パウロに行く移住者列車に乗る．

「みんなの関心はカアティンガの旅，死んだ人たち，たいそう苦しんだことなどを忘れるため，一日も早く乗船することにあった．ジュアゼイロに到着した家族のなかで，長期の旅行をはじめたときと同じ数の身内の者をつれている，無傷の者を捜すのは困難であった．

旅について語ることはかずかずあったが，たのしいことはすくなかった．だから望んでいたのは，すぐにでも乗船することだった．汽船は三等船室をぎゅうぎゅう詰めにして出帆するので，移住者たちは順番を待たねばならぬこともときどきあった．その船室では，文字どおり人びとが積み重っていたけれども，なお積み残しが出るありさまだった[15]」

この物語では船中で赤痢，マラリア患者が続出，死体は川に投げ込まれ，ピラニヤの餌食になるが，カアティンガで餓死寸前にあった人びとの胃袋は食物の誘惑に勝てなかったので，「これらの船旅では，きまって同じようなことがおきていた．つまり人びとはがつがつして魚を腹いっぱい食べ，そのうち何人かは赤痢で死ぬのだった[16]．」その後も「死者は続出し，おとなの死体までもがその浮かぶ墓場に捨てられていた．食事の時間になると，移住者の心のなかで，おいしい魚を食べたい欲望と赤痢にたいする恐怖の劇的な格闘が生ずる[17]」

このようにしても，彼らは黄金郷を夢に見，移住の旅をつづけて行く，いや夢ではない．それは執念であり，彼らにとってはひくにひけぬ旅であった．そしてピラポラから移住列車に乗るのであるが，そこで無料列車に

---

⑮ ibid., p. 81.
⑯ ibid., p. 107.
⑰ ibid., p. 107.

乗るには健康診断医の証明書が必要である．しかし栄養不良のため結核にむしばまれている者が数多く，また金もなく，汽車にも乗れず，こじきや売春婦に転落して行く．

「こじきたちはその都市にみちあふれていた．彼らは一等車に乗ってやってくる乗客を文字どおり襲撃していた．そして駅とホテルの前で，不具者のきたない群れを形づくっていた．それは病人の博物館のようだった．サン・パウロに行くことができず，かといってセルトンに帰ることもできない者たちは，いわば移住者のくずだった．彼らはここにとどまっていた．

病気の軽い者は家や食物を求めて近在の農場にやとわれたあげく，死を待つありさまだった．ほかの者たちはその都市のこじきたちの大きな群れに合流して，サン・パウロへ自弁で行くのに必要な金をもうけようとしていた．このような状態にあっても，彼らは『約束の地』に行ける希望を捨てなかった[18]」

サン・パウロに着いても，職が保証されるとはかぎらない．そこのコーヒー農園には北東部はもちろん，日本，西欧などからやってきた移民（colono）が彼らの競争相手として，彼らをおびやかしていた．職にありつけない者はコーヒー，綿花農園をさまよい，あるいは都市に流れて，失業者群を形成する運命をたどることになる．

北東部では，現在でも毎年10万人もの農民が家と土地を捨て，いな追っ払われて南部へ移住している．現在はカアティンガ——サン・フランシスコ河——鉄道のコースのほかに，道路舗装計画が進んだこともあって，トラックで輸送されて行く移住者もいる．

彼らはトラック内に立ちづくめで，2000キロもの長距離を1カ月近くかかって，南部へ南部へとひきも切らず移動して行く．その姿はちょうどとまり木にオウムがとまったようで，人びとはそのトラックのことを，「オ

---

⑱ ibid., p. 135.

ウムの籠」と呼んでいる.

彼らの行くさきはサン・パウロであり，リオである．リオには morro と呼ばれる丘の中復に，favela といわれる掘立て小屋が雑然とひしめき合っている風景がみられるが，そこの住民の大半は北東部の出身だといわれている.

VI 迷信と野盗

北東部について語る場合，落とせないのは迷信と野盗である．これについてアマードは「カアティンガにおいては，飢えにたいする反抗は，人びとを野盗行為が絶望的な神秘主義に導いている」とのべている.[19]

セルトンの産物である野盗（cangaceiro）はつい最近まで実在し，その一人であるランピオン（Lampião）を主人公とする作品がいくつか出されている.[20] 『赤い収穫』でも，この問題を一つの大きなテーマにしている．野盗たちが生まれた土壌はアマードも指摘するように，「北東部の飢え」である．アマードは作品のなかで，野盗の首領ルカス・アルボレド(Lucas Arvoredo) に，野盗になったいきさつを語らせている.[21]

「ねえ，きみ，わしがなんでそんなことをしなきゃなんねえんだい？わしはおやじが土地を取り上げられたので，野盗になったんだ．土地を取り上げたやつらは，それだけで満足しねえで，だれにもなんにも悪いことをしたことのないおやじを殺しやがった．しかもおやじの持っていた土地はちっぽけなものなのに……わしはやつらに土地を奪われるために土地を耕すなんてまっぴらだ……わしは野盗になってから11年になるし，そのまま野盗で一生を終えるつもりだ……」

しかし野盗たちは，恨みを個人的な報復手段によってはらそうとし，そ

---

⑲ ibid., p. 226,

⑳ たとえば北東部の作家の一人，ジョゼ・リンス・ド・レゴ（José Lins do Rego）に作品『群盗』(Cangaceiros) がある.

㉑ Seara Vermelha, p. 156.

のために大半の農民から背を向けられて，ついに亡んで行った．アマードは作品のなかで，地主の傭兵たちの横暴ぶりを非難しながらも，野盗たちを手きびしく批判している[22]．

「野盗の行為も許せなかった．彼らはたいていの場合，大土地の犠牲者であり，土地を所有している地主との不利な闘争の犠牲者である，セルトンのもっとも貧しい階級の出であったけれども，自分たちが受けたのと同じ苦しみをいま受けている人たちに，なんの考慮も払わなかった．彼らは盗み，殺し，婦女を犯していた」

北東部の飢えのもう一つの産物である迷信について，アマードは『赤い種子』のなかで狂信女ゼファ（Jefa）と教祖エステバン（Esteban）を登場させ，北東部の宗教問題を追求している．

北東部では前世紀末，バイーア州カヌードス（Canudos）で州政庁と地主に反抗した農民たちが新興宗教の教祖アントニオ・コンセレイロ（Antonio Conselheiro）にひきいられて，反乱をおこした．これは「カヌードスの反乱」と呼ばれ，ブラジル版の宗教戦争であった[23]．

『赤い種子』でも，教祖エステバンは州政府に反抗して蜂起するが，彼の周囲に貧困にうちひしがれた無知な農民たちが集まる様子を次のように描写している[24]．

「多くの貧しさと多くの富を持った，巨大な国にもひとしいセルトンの端から端に通ずる病気と飢えのあらゆる道に，教祖エステバンの名がひびき渡った．そしてあらゆるところから人びとがやってきて，彼のまわりに集まった．追いはぎ，盲人，ギターひき，冷酷な犯罪者，土地を追われた農民，農場の商店の借金を支払えないで逃げてきた作男，老人，子持ち女，

㉒ ibid., p. 168.

㉓ この物語はエウクリデス・ダ・クーニャの『奥地の反乱』（Os Sertãoes）にくわしい．

㉔ Seara Vermelha, p. 186.

青年，娘，結核・マラリア・らい・中風患者などが道にあふれ，夜を日についで行進し，食物を奪い，教祖を求めてやってきた．力づけ，痛手をいやしてくれるのは彼だけだった」

この「新カヌードスの反乱」もついに弾圧されたが，セルトンでは迷信がいまも跡をたたず，サン・フランシスコ河岸のジュアゼイロ市は新興宗教のメッカとして繁盛している．

移住者と野盗と狂信者を産み出していた当時の北東部は，いまもほとんど変わっていない．1925年から1927年にかけて，現在のブラジル共産党書記長ルイス・カルロス・プレステスは部下1500名とともに，北東部各地を約2万5000キロにわたって長征をおこない，各地に自由と解放を宣伝して歩いたことがあった．彼は民衆から「希望の騎士」と賛えられ，その部隊は「プレステス部隊」，「希望の部隊」と呼ばれた．その長征が未完成に終わった北東部で，数年前からフランシスコ・ジュリアン(Francisco Julião)が農民連盟をつくって大土地の解放運動をつづけていたが，これは具体的な条件に適さず，すでに影響力を失いはじめているといわれる．

一方，政府はドゥトラ(Dutra)大統領時代（1946～1951），F・D・ルーズベルトの TVA をまねて，「サン・フランシスコ河公社」（SALTA）をつくり，同河の最大の瀑布パウロ・アフオンソ（Paulo Afonso）にダムをつくり，灌漑・発電計画を進め，またクビチェック（Kubitscheck）政権も1959年に「北東部開発庁」（SUDENE）を設立して，経済・文化・教育の総合開発計画を立て，ケインズ派の経済学者セルソ・フルタド（Celso Furtado）を長官に任命し，ある程度の成果をえたが，1964年にクーデターで成立した軍事政権はフルタードを追放し，計画は挫折してしまった．

ドゥトラ，クビチェック政権とも，根本的な解決策としての土地改革に着手していなかったので，北東部の社会悪は除去されなかったが，すくなくとも前向きの政策をとっていた．しかし軍事政権はそのわずかな芽をもつんでしまった．(28)

Ⅶ アマードと北東部文学
——結びにかえて——

北東部の諸問題をテーマにして意欲的な作品を発表してきた作家は，アマードのほか，グラシリアノ・ラモス（Graciliano Ramos, 1892～1952），ジョゼ・リンス・ド・レゴ(José Lins do Rego, 1890～1957)，ラシェル・デ・ケイロス（Rachel de Qeiroz, 1910～　）などである．

彼らは1930年代の政治的高揚期に，時代の新しい息吹きに呼応し，芸術家としての良心を貫き，当時のブラジルとりわけ北東部の持つ矛盾を作品を通じてえぐり出し，「北東部文学」という新しいジャンルをブラジル文学史上に開拓した．

「北東部文学」以前のブラジル文学は，南部とりわけサン・パウロの近代主義派の作家たちが支配するところであった．彼らの多くは第一次大戦後渡欧し，かつての母国ポルトガルの文化を摂取したり，コクトー，ピカソ，マリネッティ，トリスタン・ツァラらから未来主義，表現主義，キュービズムなどの影響をうけたりして，偶像破壊と cabotinismo（やぼったさ）の追放を呼び，芸術の近代化に努めたが，反面ヨーロッパ文化を模倣するあまり，彼らの自主性とブラジル文化の伝統を見失ってしまった．

そこで，「カモンイシ（Camões）[26]の言葉でなく，自国語で語ろう」というブラジル再認識運動がはじまった．その先頭に立ったのは，米国コロンビア大学での留学生活を終えて故郷のペルナンブーコに帰った社会学者ジルベルト・フレイレで，彼は1923年に名著『大邸宅と奴隷小屋』（Casa-grande e Senzala）を書き，ブラジルの人種問題を研究するとともに，伝

㉕ Panorama Económico Latinoamericano, No. 177., 1966, p. 15.

㉖ ルイス・デ・カモンイシは16世紀のポルトガルの詩人．ポルトガル文学の創始者といわれ，民族詩『ルシアダス』(Lusíadas) があり，彼の作品は古典文学として，コインブラ大学で話されるコインブラ語とともに，ブラジル知識人の夢であり，あこがれの対象であった．

統への復帰運動を展開した.

この運動は狭い植民地根性 (complexo colonial), 劣等感 (complexo de inferioridade), ヨーロッパの価値と水準への盲従などにたいする反動としておこったものであった. 近代派の作家たちは古いブラジル文化と伝統の破壊をめざしていたが, フレイレのグループはこれと反対にヨーロッパの遺産を価値あるものとして受けつぐと同時に, 熱帯の風土, ブラジルの生活条件に合致した新しい価値を発見しようと努めた.

しかしフレイレの地方運動は先駆者的なものにとどまり, その開花は北東部作家の活躍に待たねばならなかった. 彼らの活動は1930年当初からはじまるが, その最盛期を迎えたのは1935年前後であった. すなわちそのころには, ファシズムの世界的な台頭にともない, その影響がブラジルにも波及し, ときのバルガス (Vargas) 政権はナチスの援助をうけたファシスト団体「インテグラリスタ」(Integralista) の支援を受けて, ブラジルをファッジョ化しようとしていた.

このとき, ブラジルではこれに対抗して, 反ファシズム人民戦線「民族解放同盟」(Alliança Nacional Libertadora=ANL) が成立したが, 北東部の作家もファシズム反対, 自由・民主主義・伝統文化の擁護を叫んで, 闘争に参加したのであった. その時期にブラジルの文化は新しい生活のうえでめざめ, 芸術とりわけ文学の分野でルネッサンスが実現した. これについてアマードは次のようにのべている.[27]

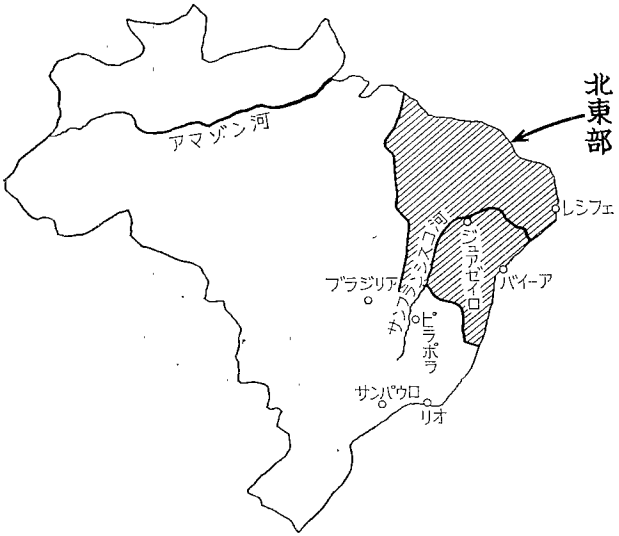
「ブラジル国民が彼らの問題とその解答を知ろうとしていた時期に, ブラジルの全土から新しい声, 公正な声がおこり, ブラジルの生活の劇的な分布図を示すことになる. ジルベルト・フレイレ, アルトゥール・ラモス, エディソン・カルネイロ (Edison Carneiro), カイオ・プラード・ジュニア (Caio Prado Junior) らは歴史・社会・経済学のための新しい道を求

㉗ Jorge Amado: El Caballero de la Esperanza, Editorial Futuro, 1958, p. 211. この本はブラジルでは発禁になっている.

めようとする．ジョゼ・リンス・ド・レゴは砂糖にまつわる生活について語ろうとする．またジョゼ・アメリコ（José Américo）はすでに日照りの『犠牲者』の物語を完成していた．ラシェル・デ・ケイロスはセアラ州を再発見する．ディオネリオ・マシャード（Dionelio Machado）とエリコ・ベリッシモ（Erico Veríssmo）はリオ・グランデ・ド・ノルテについて語る．アマンド・フォンテス（Amando Fontes）はアラカジュの砂糖工場について，アブグアル・バストス(Abguar Bastos)はアマゾンの生活について，それぞれ研究する．グラシリアノ・ラモスは民族小説をかつてない高い水準に引き上げる」．

しかし北東部文学を中心に開花したブラジル文化は1935年11月，「民族解放同盟」の闘争が敗北に終わってから衰退の一途をたどった．とくに1937年，バルガスがムッソリーニばりの協同組合国家「新国家」（Estado Novo）をつくって以来，暗黒と恐怖の政治がしかれ，北東部の作家たちは筆を折って沈黙したり，海外に亡命したり，政治的・社会的関心からはなれて，心理を追求する内省的な作風に移って行ったりした．

現在，グラシリアノ・ラモスとジョゼ・リンス・ド・レゴは亡く，ラシェル・デ・ケイロスはもっぱら評論に力を注ぎ，アマードだけが健筆を奮っている状態である．しかし彼らが1930年代にはたした役割をブラジル文学史から抹殺することはできない．これについてジルベルト・フレイレは，「北東部の病める文化は，われわれに真珠のはいったか牡蠣を連想させる．北東部文学はそれらひとにぎりの真珠である」といっているが[28]，けだし適言である．またフレッド・P・エリソンは「ラテン・アメリカ文学の研究者たちは，北東部文学をガウチョ文学，インディオ文学，メキシコ革命文学などの主要なタイプの文学と同列に置くことに同意しなければならない」といっているが[29]，これも正しい評価だといえよう．換言すれば，「北東部

㉘ Gilberto Freyre: Nordeste, José Olympio, 1937, p. 220.
㉙ Brasil's New Novel, p. 157.

文学」はブラジルの一地方，一民族文学の域を越えて，ラテン・アメリカ文学のメインストリームの地位を占めているのである．